

JCCP NEWS

Vol.07 Iss.02



JCCP



CONTENTS

P.2-3 ... 特集 経済的自立の支援

南スーダンでの職業訓練/ケニア:畜産を通じた経済的自立とグループ間の共生支援/NGO長期スタディプログラム報告

P.4 ... マケドニア:多民族の小学生による共同植林

P.5 ... ケニア:薬物使用の防止と使用者の更生を目指す取り組み

P.6 ... 南スーダン独立/インターン企画:在南スーダン代表 日野愛子インタビュー

P.7 ... トピックス:ご支援へのお礼/JustGivingによる新しい支援方法

P.8 ... プロジェクト一覧/新任スタッフからのご挨拶/JCCPカレンダー/ご支援のお願い

南スーダンの職業訓練(調理補助)
自分たちで作った料理を試食する訓練生たち。
ホテルやレストランへの就職は自立への第一歩。

「自分の力で収入を得ること」を夢見て訓練に励む若者たち



特集：経済的自立の支援

職業訓練の様子をYouTube動画でご覧いただけます。
<http://www.youtube.com/user/JCCPchannel>

単に与える支援ではなく、一人ひとりが自立できるようになるための支援。それがJCCPの目指す支援です。

紛争が終わり、治安が改善しつつある地域であっても、生計を立てることができず、将来に希望を抱くことができない人々がたくさんいます。人々が不満を抱えたままの状態が続くと、暴力や犯罪、麻薬の使用などにつながり、再び治安が悪化する事態になります。JCCPが行う経済的自立の支援では、まず収入を得るための技術を身につける機会を提供します。そして、住民が力を合わせて小規模な起業を行い、収入向上に取り組むことによって、コミュニティの能力を強化できるよう支援しています。

今号では、JCCPが南スーダン*およびケニアにおいて実施している経済的自立支援をご紹介します。

南スーダンでの職業訓練

◆ 就労の機会を奪われた若者たち

南スーダンの首都ジュバでは、20年に及び内戦により、教育の機会を奪われたり親を亡くしたりして、路上生活などの困難な生活を強いられる若者が大勢います。

JCCPは2009年12月より、このような若者を対象に、経済的に自立できるようにするための職業訓練を実施しています。職業訓練の参加者は、ジュバ市内のホテルやレストランなどで就業する際に必要となる調理補助・接客やハウスキーピングのスキルを身に付けるために、約8週間にわたって訓練を受けます。その後約2週間から4週間にわたってホテルやレストランでの実地訓練(OJT)に参加します。

◆ 手段としての「働くこと」を伝える

訓練参加者の中には、今までに一度も職についてきたことのない若者や、路上での生活に慣れ「就職する」ということを思い描けない若者も少な

くありません。

独立前後から急速に発展が進むジュバで、JCCPスタッフが就職の斡旋のために何度も足を運んで一流ホテルでの就職が叶っても、自分の希望する職務内容と異なることや、思い描いていた「就職」とのギャップに悩み、簡単に辞めてしまう訓練生もいました。

そのため、訓練のなかで、「労働は自分の目標を叶えるための手段のひとつで、時には苦勞も伴うこと」「安易にあきらめる前にもう一度考えてみること」など、働くことの大切さを伝え、働くということを実感としてつかめるように支援しています。また、就職した先輩の話や先輩の話を聞き就職ガイダンスを行ない、出来る限り多くの卒業生が就職できるような取り組みを行っています。

◆ 新しい人生へ

今年の5月には2009年12月の事業開始から数えて第3期目の職業訓練が終了し、37人の



レストランでの接客の実習風景。サービスという考えを理解することから始める。

訓練生が卒業を果たしました。卒業式には、南スーダンの労働省局長、そして訓練生の保護者も出席しました。式中、以前はストリートチルドレンであった青年が卒業生代表としてスピーチを行いました。出口の見えなかった路上での暮らし、職業訓練を通じて得ることのできた新しい生活、そして今後の抱負を語り、列席者から盛大な拍手が送られました。その他の卒業生たちもそれぞれの選んだ道を進んでいます。

地域情勢や経済の状況が刻々と変化する南スーダンで、若者たちが就職し生計を立てることには多くの壁が立ちはだかります。JCCPは、今後も雇用の傾向や求められるスキルの変化に配慮しながら、自立に直結した支援を続けていきます。

* 今年1月、南スーダンの住民による国民投票が行われ、7月9日に分離独立を果たしました。



南スーダン：路上生活を余儀なくされる子供たち



ケニア：ナクル市の避難民キャンプのテント



ケニア：家畜用のヒツジを受け取る避難民キャンプの住民

ケニア：畜産を通じた経済的自立とグループ間の共生支援

◆ 暴動で住む場所を奪われた人々

ケニアには、2007年の大統領選挙後の暴動当時、住んでいた土地を追われて30万人以上の国内避難民が発生しました。再定住先では、元避難民の人々が生計を立てる手段が乏しいことに加えて、もともとその土地に住んでいた住民（ホスト・コミュニティ）との関係悪化が問題となっています。

◆ 経済的自立を目指す取り組み

JCCPは、元避難民グループとホスト・コミュニティが、共同でヒツジやニワトリなどの飼育

を行うことができるように支援を行っています。その目的は、元避難民グループとホスト・コミュニティの経済的自立を支援することに加え、両グループ間に交流を設けることです。その結果、両者の相互理解を促進できるよう支援しています。

◆ 平坦ではない道のり

事業を進めるにあたっては、メンバー間の不信をはじめ、多くの困難に直面します。信頼を醸成するためには話し合いの場を何度も設けるほか、互いを理解し合う環境づくりを行います。また、つい目先の利益を求めて手元の家畜を

全て売り払おうとする人たちもいます。そのため、1年後、2年後に自分たちがどのくらい収入を得られるようになり、どのように家畜と収入を増やしていくかという具体的なイメージを持てるよう、家計管理の説明も行っています。数年後まで安定した収入を得る仕組みをつくるという本来の目標に気付くように促すほか、将来的に現地住民がイニシアチブを取ることができるよう、現地NGOにもノウハウを伝えつつ、共に事業を進めています。

* 南スーダンでの経済的自立支援活動は、JCCP会員や寄付者の皆様、ユイット株式会社からのご支援と、特定非営活動法人 ジャパンプラットフォーム(JPF)の助成により実施しています。
* ケニアでの経済的自立支援活動は、JCCP会員や寄付者の皆様からのご支援と、独立行政法人 国際協力機構(JICA)の助成により実施しています。

マイクロファイナンスとJCCPの活動

NGO長期スタディプログラム報告－成果と展望

報告：JCCPプログラムスペシャリスト 斉藤隆祐

2010年10月から2011年1月までの期間、外務省主催2010年度NGO長期スタディプログラムに参加し、バングラデシュのBRAC大学、JCCPの事業地でもある南スーダンのBRACおよびケニアのK-Repグループという3箇所の主要なマイクロファイナンス機関(小規模融資機関。以下、MFI)で研修を受講しました。JCCPが行う平和構築事業において、紛争期から復興期に移行する過程で経済的側面の支援は重要な位置を占めます。過去にはアフガニスタンで除隊兵士に対する職業訓練、また現在ではケニアや南スーダンにおいて小規模ビジネス支援や職業訓練を実施しています。今回MFIでの研修を選択したのは、JCCPのこのような実績を基に、経済的自立を長期的にサポートする手段の一つとして、コミュニティに既に根ざしているMFIとの連携の可能性を検証

することが目的でした。マイクロファイナンスのサービスを行うには、一律ではない地域性や経済的要因を考慮しプロジェクトを策定することが必要となります。利用する貧困層の人々にも一定の経済および教育レベルが必要です。また、MFIは融資事業だけでなく様々な国際機関やNGOと連携してプロジェクトを実施しています。支援プロジェクトを拡大させて企業を創設しビジネス化するなど、多角的に貧困解決に取り組んでおり、その運営方法や課題について詳しく知ることができました。このことは、事業の方向性や出口戦略を検討する上で参考になります。今後は、JCCPが持つ紛争予防や平和構築の専門性と、MFIが得意とする経済支援の専門性を互いに連携させることによって、より実効的な支援方法を検討していきたいと考えています。



スーダンで、BRACとJCCPの協働プロジェクト案についてプレゼンテーションする斉藤隆祐



南スーダンBRACのマイクロファイナンスの顧客グループを訪問

※ 外務省ホームページから報告書をご覧ください。
http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shimin/oda_ngo/shien/study_p.html

和気あいあいと植林を行う子どもたち。
お揃いのTシャツを着ることで連帯感を深める。



MACEDONIA 苗木と共に育て。平和の芽

*このプロジェクトは、JCCP会員や寄付者の皆様からのご支援と、外務省・日本NGO連携無償金協力からの助成により実施しています。

マケドニア 多民族の小学生による共同植林

◆ いよいよ植林がスタート

JCCPは民族対立の火種がくすぶるマケドニアで、小学生を対象とした交流事業を続けています。現在はペトロバツ郡において共同植林のプロジェクトを実施しています。

冬の間、ワークショップで植林に関する勉強をしたり、お互いに親睦を深めたりして準備をしてきた子どもたち。春が来ていよいよ植林が始まりました。作業にあたっては別の学校や民族の子どもたちが混ざるようにグループ分けをします。初めての試みに緊張していたのは生徒たちばかりではなく、教師たちも同様でした。実際に作業を行った様子をJCCPのプロジェクト調整員がご報告します。

◆ 植林を通して生まれる民族間の友情



【プロジェクト調整員 末藤千翔】
ペトロバツ郡でのプロジェクトを開始して約6ヶ月が経ちました。植林のための重機やスコップなどの資材が整い、2011年6月現在で既に約250名の子どもたちが作業に参加して約2000株の苗木が植えられました。子どもたちは植林活動に興味を持つだろうか？同じ民族の友達同士でグループを作ってしまう、新しい交流の機会にならないのではないかと——そんな私たちの心配を子どもたちは見事に拭い去ってくれました。マケドニアの国旗やプロジェクト名がプリントされたTシャツを受

活動の様子をYouTube動画でご覧いただけます。
<http://www.youtube.com/user/JCCPchannel>

け取り、スコップなどの資材を手に植林地に集まった子どもたちは皆、植林という珍しい経験と屋外での作業に興奮気味の様子です。活動を進めていく中で初めて会う他民族の友達とも自然と会話が生まれ、作業中もあちらこちらから笑い声が聞こえてきます。

一日の活動が終わり帰り支度をする私たちに対して、「次はいつ来るの?」と尋ねた子どもたちの笑顔に、その日の活動が有意義なものであった事を実感しました。

小さな苗木が森となる頃に、大人になった彼らがマケドニア、そしてバルカン地域の発展を担ってくれること、さらにはこの民族間交流の活動がその礎となることを強く願ってやみません。

平和構築の達成状況を測る

◆ 平和とは何か

JCCPは、武力紛争による被害を受けた国や地域で、長期的に平和を構築することを目的に活動を行っています。しかしながら、平和構築の達成状況を客観的に測定し分析することは容易ではありません。武力衝突の回数や死者数など客観的に測定することが可能な指標もありますが、それらを条件の異なる全ての平和構築事業の成果を測るために適用することはできません。平和構築の達成状況を多角的に捉えるためには、実際にその地域に生活する人々が自分たちの地域や社会についてどのように感じているかを調査分析することが重要です。

◆ 平和構築指標の作成

そこでJCCPでは2011年7月よりマケドニアの共同植林作業を通じた民族間の交流促進事業の成果を測り、平和構築の達成状況を測定する手法として、対面によるアンケートを用いた調査を行うとともに、一定の条件で集められた対象者に詳細な聞き取りを行うフォーカス・グループディスカッションと呼ばれる調査を実施する計画です。

この調査に用いる指標を「平和構築指標」と名付け、将来的にJCCPが実施する平和構築事業の成果を測定する一つの指標として活用することを目指しています。

【指標の一例】

◇ 自分の生活するコミュニティでの夜間の外出を控えているかどうかや、「他の民族が生活する地区への訪問を不安に感じるか」などの質問を通じて、治安に関する認識を調査

◇ 「他民族との交流の頻度や回数」、「他民族との交流することへの意欲」について質問することで、民族交流に対する人々の意識レベルを調査

◇ 「自分の住むコミュニティを多くの民族が共存する社会にしたいと思うかどうか」について質問し、住民の認識を調査

訓練を受けるコミュニティ・アニメーター。
異なる宗教や職業、性別の混合チームで編成されている。



KENYA

自分たちの力でコミュニティを守る

*このプロジェクトは、JCCP会員や寄付者の皆様からのご支援と、独立行政法人 国際協力機構 (JICA) からの助成により実施しています。

ケニア 薬物使用の防止と使用者の更生を目指す取り組み

◆ スラムに広がる薬物使用

紛争地では、様々な不安やストレスから薬物依存になる人が多く、その影響は子どもにまで及んでいます。

JCCPは2011年5月よりナイロビのマザレスラムにおいて、「薬物使用者に対する心のケア事業」を開始しました。麻薬などの薬物の身体への害や社会への影響に関する啓発活動と、薬物使用者に対するカウンセリングを行い、薬物使用を防止することが目的です。

◆ 現地ボランティアが活躍

啓発とカウンセリングを中心となって進めるのは、2010年にマザレスラムで実施したプロジェクト「暴動被害者の心のケア事業」に従事したコミュニティ・アニメーター（以下CA）と呼ばれる現地ボランティアたちです。この事業で活躍したCA25名によって2011年1月に現地組織 Animators for Development (以下、AFD) が設立され、マザレスラム住民の健康改善や能力強化のために活動しています。CAたち自身もマザレスラムの住民であり、マザレスラム特有の事情を知っていることから、2010年の心のケア事業では、自分たちのコミュニティや住民の生活状況を改善しようと主体的に取り組んできました。コミュニティの絆を強く住民に活力を与えることにもつながったことから、今回の事業でも大きな役割を担う事が期待されます。

JCCPでは、AFDの組織運営と事業推進能力の強化を支援するとともに、カウンセリングの

専門機関や医療機関と連携を強めて事業を進めています。

◆ カウンセリングの訓練

既に過去のJCCPの事業で基本的な心理ケアについて実践してきたCA25名を対象に行われた3日間にわたる訓練セッションでは、CAたちが実際に薬物使用者に対してカウンセリングするために必要な、薬物と薬物中毒の知識、カウンセリングやリハビリテーションの方法などについて集中的に研修を行いました。

マザレスラムでは5歳から18歳までの子どもたちの薬物中毒症状が数多く報告されていることから、子どもの薬物使用の背景にある社会的要因に対する理解の大切さについても議論が交わされました。

マザレスラムの住民でもあるCAが住民の状況を的確に把握することで、専門家では目の届かないごく早期の段階で薬物使用の兆候をつきとめ啓発を行うことができます。

今後は、トレーニングで得た知識や技術を活かし、カウンセリングと啓発活動を通してのべ約5800人の住民を対象に薬物防止の啓発を行っていきます。

【カウンセリング事例：薬物使用者の13歳少年】

2010年に実施した「暴動被害者の心のケア事業」では、CAが薬物使用者の少年(当時13歳)に対してカウンセリングを行いました。少年へのケアの様子や表れた変化について、CAの報告をご紹介します。

◆ 辛抱強い関わりが生んだ変化

【男性CAの経験談】

私とその13歳の男の子に会ったのは2010年の8月。彼は日常的に薬物を使用していました。仲間たちと町中をふらふらとしているばかりで、自分の将来には少しも関心を持たず、年長者の意見には耳を貸そうとしません。横柄な態度を見せ、差し伸べられる手を拒み、粗暴に受け応えをする彼に、カウンセリングを中断せざるを得ないこともしばしばでした。

それでも辛抱強く向き合い、学んだ知識とスキルを活かし彼に合わせて工夫したカウンセリングを続けるなか、12回目で彼は初めて前向きな変化を見せ始めました。後見人とも、彼のなかで大きな変化が起こっていることを確かめ合いました。そして彼自身も、心理ケアを受けていなかったら、暗闇を歩くような破滅的な人生になっていただろうと打ち明けてくれました。

薬物を使用せずに自分自身を律することができるようになった彼は、現在は学校に通っています。学校での成績は優秀とは言えないものの、得意科目である体操やダンス、演劇の授業で力を発揮しています。同じ学校に通う私の息子とも友達になり、一緒に学校生活を送っています。

『子どもの心理ケアハンドブック』(2011年 JCCP作成)より抜粋

新しい国づくりの希望に燃える南スーダン



2011年7月9日、アフリカ54番目の国「南スーダン共和国」が誕生しました。

20年間に及ぶ北部との内戦が終結し、本年1月に行われた住民投票の結果に基づいて、スーダン南部が分離独立を果たしました。

独立を果たしたとはいえ、近隣諸国からの民兵組織の襲撃が続く国境の管理、人材が不足してい

る政府の能力強化、北スーダンとの国境付近における油田の権利をめぐる対立、南スーダン国内での部族問題等、課題は山積んでいます。今後は国際社会の支援を受け、国家体制の強化を推し進める必要があります。

一方、南スーダンは、石油資源のほか、精密機械に欠かせないレアメタルの資源があること、農業に適した肥沃な土地など、適切に活用されれば希望につながる要素もたくさん有している国です。

JCCPは、2009年の12月からスーダン南部(当時)のジュバにおいて、スラムの若者やストリートチルドレンを対象に、啓発と職業訓練を行っています。20数年以上に渡る内戦の末、自らの手で自由と国土を手に入れた南スーダンの人々。様々な課題を抱えながら新しい国づくりに取り組む南スーダンの人々が、これからさらに自ら人生を切り開くことができるよう、今後も支援を続けていきます。

インターン企画

「仕事はきつい。でも南スーダンの未来のためにがんばります。」

在南スーダン代表 日野愛子へのインタビューを通して、駐在生活や現地の活動の様子をお伝えするインターンによる企画です。

Aiko Hino

米国の大学院にて国際平和及び紛争解決学修士号を取得後、アジア及びアフリカにおける平和構築プロジェクトを管理・運営し、特に赴任地であったスーダンでは国連機関と共同で地雷対策活動に従事。2008年からは在ウガンダ日本国大使館にて経済協力調整員を務め、援助効果促進に係る取り組みのフォロー及び対ウガンダ日本ODA案件を管理。2010年12月よりJCCP在南スーダン代表*。

* 2011年7月9日の南スーダン独立に伴い、JCCP在南スーダン代表事務所は、JCCP在南スーダン代表事務所に変更いたしました。

Q: なぜ現在の様な職業を選ばれたのですか。

A: 小学生の頃からなぜか紛争や戦争というテーマに興味があり、「はだしのゲン」を熱心に読むような子でした。そして大学まで興味は変わりませんでした。JCCPで働くことにしたのは、日本で唯一、紛争の問題を扱うNGOだったからです。

Q: 読者の皆さんに南スーダン代表の日々の業務内容を紹介していただけますか。

A: ストリートチルドレンへのライフスキル向上支援(職業訓練・啓発)や住居提供を行っています。若者の生活改善/経済的自立を促し、中・長期的に平和構築へとつなげるプロジェクトです。これらのプロジェクトの管理・運営に加えて、人事(南スーダン人職員が12名/日本人職員が本人以外に1名)、経理、総務といった事務所の運営、現地関係者との関係作りなど業務は多岐にわたります。

Q: 現地の暮らしで一番大変なことは何ですか。

A: 娯楽がほとんどないので気分転換に苦勞します。夜は危険なので遅くても10時頃にはホテルに戻らなくてはなりません。ホテルと言ってもプレハブ小屋のような狭い部屋です。気温は暑いと40度以上にもなるので気分転換で運動!というわけにもいきません。唯一の気晴らしは、現地の同業者と、近年急速に増え始めた外資系のレストラン等に行ったりすることですね。

Q: 南スーダンで外資系レストランですか。

A: 最近はサービス業が増えてきてイタリアンレストランとかもあるんですよ。でもこれは社会問題ともつながっていて、サービス業をしたことのない南スーダン人よりも経験のあるケニアやウガンダから来た労働者が雇用され、南スーダン人は彼らに対し敵対心を持つことが少なくないんです。JCCPが行うサービス業の職業訓練は、南スーダンのこういった問題を解決するものだと思います。

Q: 仕事をされる上で最も心がけていることは何ですか。

A: 現地職員の能力を向上させることです。一人一人の能力を見極め、自分たちでできることは極力自分たちでやってもらうようにしています。最終的には南スーダン人スタッフだけでできるようにするために私たちの活動によって最大限の効果が得られるように常に心がけています。彼らがその気持ちに伝えてくれたときは最もやりがいを感じます。



職業訓練に参加するストリートチルドレンのために提供された簡易住居の前で。大家さんと。

Q: 南スーダンが独立しましたが、今後JCCPとしてどのような活動ができるでしょうか

A: 国家形成の段階にある南スーダンでは、他の国々の協力やNGOの支援が重要です。日本のNGOが得意とする草の根レベルの活動のみならず、行政への働きかけや、両者の中間的アプローチが必要になってくると思います。特に治安改善事業の分野では、JCCPとしてもケニアやソマリアの事業で得たノウハウを生かして南スーダンでのニーズにも応えていけたらいいですね。

最後に一言お願いします!

南スーダンは今、国家を創るんだ!という希望にあふれています。そのような中でJCCPに活動の機会が与えられていることを誇りに思います。南スーダンの人々が真に自分たちの力で発展する礎を築けるよう、経済的自立支援による紛争予防を目指してこれからもプロジェクト形成・実施に力を注いでいきます。ご支援よろしくお願いいたします!!

Interviewers
(JCCPインターン)



ビートル・ハグッド
ブラジル出身。
東京大学 教養学部
国際関係論分科4年生。



大石 彩夏
青山学院大学3年生。
好物はベビースター。
勉強と反省の毎日です。



伊藤 和子
一児の母。
子供たちの幸せに貢献したいと思っています。

株式会社ファンケル様からの寄付

2011年5月

株式会社ファンケル様及びもっと何かできるはず基金事務局様から、20万円のご寄付をいただきました。「もっと何かできるはず基金」は従業員の皆様が社会活動参加の一環として自主的に運営しています。この紙面を借りまして改めて厚く御礼申し上げます。

書き損じハガキの集計報告

JCCPでは、書き損じハガキ・未使用ハガキ(暑中見舞いハガキ/年賀ハガキ含む)を募集しています。ハガキは切手や現金に交換し、JCCPの事業に活用させて頂いております。この度、皆様から頂いたハガキを集計いたしましたので結果をご報告します。

2009年9月から2011年5月の期間に集まった枚数：2,524枚

換金後の金額：93,580円

ご寄付頂いた皆様に、心より御礼申し上げます。

ボランティアデー報告

2011年5月

5月7日、東京本部事務局でボランティアデーが開催されました。連休中にもかかわらず多数のご応募をいただきました。当日集まっていたいただいたボランティアの皆様にはニュースレターの発送作業をお手伝い頂きました。JCCPの事務所に初めて足を運ばれた方や、ボランティア自体

が初めての方もおられ、海外事業の話も交えながら和気あいあいと作業が進められました。JCCP職員にとりましても支援者の方々と交流する貴重な機会となりました。

温かいご支援に心より御礼申し上げます。



作業の間も会話が弾みました

JustGivingによる新しい支援方法

JustGivingとは、支援する団体を指定しチャレンジを登録すると、そのチャレンジを応援するサポーターからの寄付が、指定された団体に届くというシステムです。

チャレンジの内容は自由。

あなたもチャレンジャーとして寄付を集めていただけます。

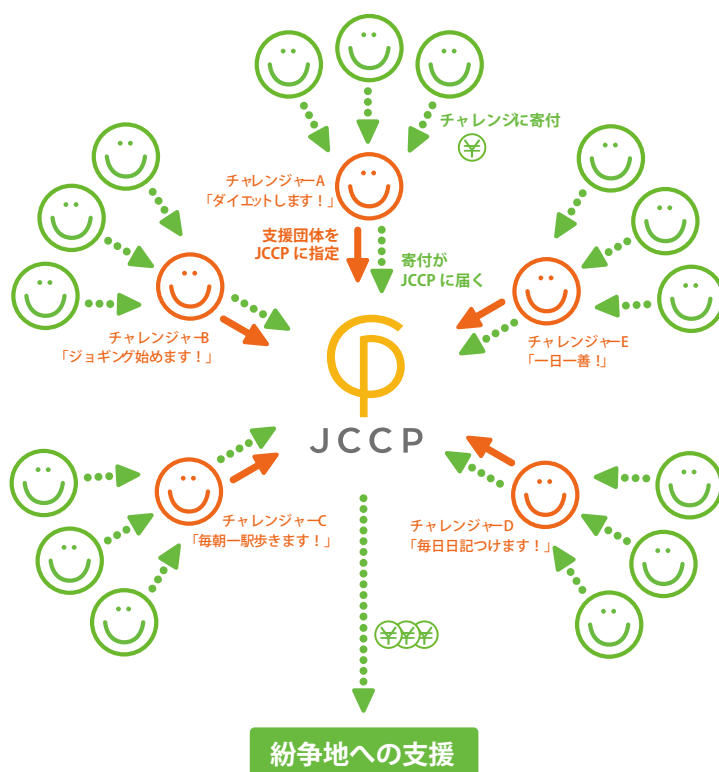
JustGivingを通してJCCPに集まった寄付は紛争地への支援に役立てられます。



JCCP職員もチャレンジしています！
海外事業担当 脇坂知典
応援よろしくお願ひします。
詳細はホームページから

JCCP脇坂

検索



JCCPのプロジェクト一覧 (2011年4~6月)

※事業開始順に記載しています。

事業名: 国際平和支援研修センター(IPSTC)への平和支援研修及び組織強化事業
事業地: ケニア
期 間: 2010年2月1日~2011年6月30日
助 成: 国連開発計画(UNDP)

事業名: 南部スーダンにおける子どもと若者へのライフスキル向上支援事業
事業地: 南スーダン
期 間: 2010年12月11日~2011年5月15日(第3フェーズ)
2011年5月18日~2011年8月17日(第4フェーズ)
助 成: 特定非営利活動法人 ジャパン・プラットフォーム(JPF)

事業名: 選挙暴動後のIDP及びスラムコミュニティにおけるCBO能力強化を通じた共生プロジェクト
事業地: ケニア
期 間: 2010年2月20日~2011年8月31日
助 成: 独立行政法人 国際協力機構(JICA)

事業名: 異なる民族間の共存促進/
ペトロパツ郡の多民族の小学生と住民による共同植林とワークショップ事業
事業地: マケドニア
期 間: 2011年1月25日~2012年1月24日
助 成: 外務省・日本NGO連携無償資金協力

新任スタッフからのご挨拶

在ケニア代表事務所 ソマリア事業プロジェクト・マネージャー
中川 禎人(なかがわ よしと)

自己紹介:

はじめまして、中川禎人です。ソマリア(ソマリランド)に派遣予定ですが、スーダン・ケニア両事務所、準備作業を行っています。
これまで、コンサルティング会社や、JICA、国連を通じて、途上国におけるガバナンス改善、特に政府とNGOとの'新しい公共スペース'の拡大を通じた公共サービスの改善に注力してきました。NGOでの仕事は初めてで、学ぶことが多いと思っています。次回以降のニュースレターで、徐々にソマリア事業をご紹介しますと考えています。よろしくお祈りします。

在南スーダン代表事務所 プロジェクト調整員
渡邊 温子(わたなべ あつこ)

自己紹介:

この度、調整員として赴任した渡邊です。日本の中学校で働いた後、ポリビアやインド北部で教育を通じた文化・アイデンティティの保持をテーマにインターンをし、最近ではユニセフウガンダで初等教育やノンフォーマル教育を推進するプロジェクトに従事していました。教育を通じた平和構築を続けていくのが自分の目標です。
スーダンでは、ストリートチルドレンや生活の基盤の弱い若者たちのために、保健衛生やHIV/AIDSの知識を教える啓発活動や自立を促すための職業訓練事業に従事しています。これから新しい国を築いていく子どもたちの力になれば、と考えております。どうぞよろしくお祈り致します。

JCCPカレンダー [講演会/セミナー、メディア掲載/出演]

4月
JCCP在ケニア代表 石井由希子が在ケニア日本大使館のホームページで紹介されました。

5月11日(水)
ニューズウィーク日本版2011年5月18日号(5/11発売)の特集「世界が尊敬する日本人25」に瀬谷ルミ子事務局長の紹介記事が掲載されました。

5月31日(火)
群馬県立女子大学にて、瀬谷ルミ子事務局長が「生きる選択肢を、紛争地の人々へ」のタイトルで講演を行いました。

4月
国際ボランティア学生協会(IVUSA)のフリーペーパー「Youth Acty!」に瀬谷ルミ子事務局長のインタビュー記事が掲載されました。

5月29日(日)
U理論実感&実践ワークショップ「開拓者たち~Uが拓く明日への扉~」(オーセンティックワークス株式会社主催)に瀬谷ルミ子事務局長がゲストスピーカーとして登壇しました。

6月3日(金)
陸上自衛隊国際活動教育隊の陸上自衛官に対し、瀬谷ルミ子事務局長が「SSR, DDRの現状とその実態」についての講演を行いました。

ご支援のお願い

JCCPの活動は、皆様からのご支援によって支えられています。(JCCPは認定NPO法人です。JCCPへのご寄付は税額控除の対象となります。)

● 会員になる ● マンスリーサポーターになる ● 寄付をする ● 書き損じハガキを送る ● ボランティアをする ● JustGivingで寄付を集める
詳しくはお電話かメールでお問い合わせいただくか、JCCPのホームページをご覧ください。 www.jccp.gr.jp



認定NPO法人 日本紛争予防センター
〒112-0014
東京都文京区関口1-35-20 藤田ビル3F
TEL: 03-5155-2142
FAX: 03-5155-2143
E-mail: contact@jccp.gr.jp
URL: www.jccp.gr.jp

発行日 2011年7月29日
発行人 堂之脇光朗
編集人 瀬谷ルミ子
Volume 7, Issue 2

顧問	近衛忠輝 明石康	日本赤十字社社長 元国連事務次長
理事長	堂之脇光朗	元外務省大使
理事	入山映 植村高雄	サイバー大学客員教授 (特活)CULLカリタス カウンセリング学会会長
	小川和久 瀬谷ルミ子	危機管理総合研究所所長 (特活)日本紛争予防センター 事務局長
	永井恒男	野村総合研究所(NRI) コンサルティング事業本部
監事	柴田秀孝	(株)エムアンドアール 顧問